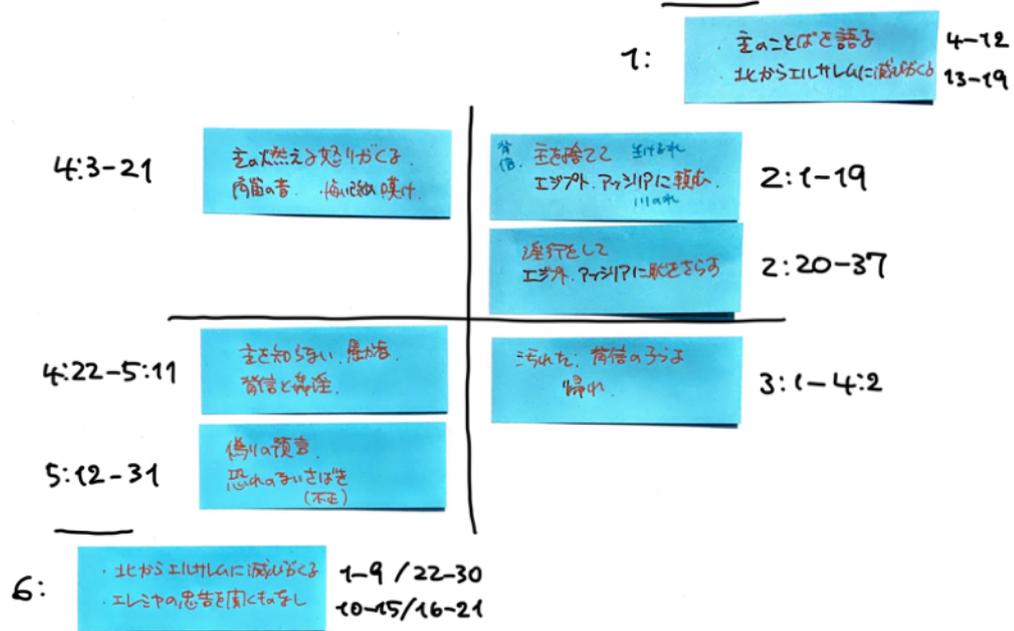




## エレミヤ書 1:-6:

### エレミヤ書 1:-6:



エレミヤ書の1章から6章を分析しました。最初の大きなまとまりです。1章から6章は、非常に分けにくい。分けにくいのは、神様が直接言っている言葉なのか、エレミヤが引用をしている言葉なのか、エレミヤが言っている言葉なのか、よく分からない流れになっているからです。ただし、全体を並べてみると、何かまとまりがあるということはわかります。エレミヤ書の紙に色を塗って分けてということをしていく中で、ここはまとまっているね、この言い方はこっちにも出ているね、というのは何個もあるので混乱しましたがけれど、今はこう考えています。

1章がエレミヤ書の出だし、導入になっていて、2章以下が本文と考えるのが普通なのですが、1章から6章という段落で見ると、6章が1章と並行しているのではないかと思います。1章で言われているのは「エレミヤはことばであると預言して宣言する」ということと、「北の国からさばきが来る」というこの2つを言っていますよね。6章は同じように、「北からエルサレムに滅びが来る」と。北からエルサレムに滅びが来る。青銅、鉄、この辺にも青銅、鉄がありますよね。城壁、あなたを城壁にしたというところもあります。それと、誰が語るのかと。忠告に対して聞くものがない。忠告を聞かないというようなことを言ったりしていますので、1章と6章が並行していると見ていますね。

その間、2章から5章までを分けると、全体を広げてみるとなんとなく、この右側には「姦淫、主を捨てる、背信の子ら、帰る」みたいな言葉が多いですね。後半には、背信

とか姦淫とかもあるのですけれど、「燃える怒りが来る、さばきが来る」というのが多く見えるような感じがします。それで分類していきました。

2の1から、2の20からという2つの段落と、3章。4章の3節から、4章の22節から2つの段落というのを、A4の紙で一つの段落、この青いラベル1つずつが、A4一枚になっています。最初の2つの段落、例えばどういうところが目立つのか。ここ(2の1から、2の20から)は2つを1つと見えています。この2つのどういうところが特徴があると見ているのかというと、「祭司、つかさ、預言者」がここにいますよね。ここにも(2の20から)「祭司、王、預言者、つかさ」があります。「主を捨てる」というのが、この1枚目(2の1から)に目立ちますね。こちら(2の20から)は淫行して恥をさらしているというような感じですね。主を捨てている(2の1から)と、淫行している(2の20から)という、主を捨てていることの神様を嫌っていることを、2つの面で表してるのかなと。どちらの段落も終わりの方に、「エジプトとアッシリア」。「アッシリアとエジプト」が出てきますよね。

(2の1から)主の水をいらない、生ける水を捨てる。そしてエジプトの川、アッシリアの川の水を飲もうとしている。ナイルとユーフラテス。いのちの川みたいな感じなので、エジプトのいのちの川、アッシリアのいのちの川。全世界に流れている目に見えるいのちの川という感じですかね。エジプトにいのちを与える。アッシリアにいのちを与える。そのいのちの川を飲もうとして、本当の生ける水の川を捨てるという、これが背信ということですね。

今度こちら(2の20から)は、淫行を行うということが、2番目の段落で言われていますので、アッシリアにはずかしめられる、エジプトにはずかしめられるということが、後半に書かれています。その2つですね。主を捨てる、背信。そして淫行。

その人たちに対して帰ってきなさいということ、3の1から言うわけです。「帰れ、帰れ、帰れ、帰れ」。「帰ってくるように招く」ということですね。帰ってくるようにと言うのですが、興味深いのが、この中で、背信のイスラエル、背信の子らと言われます。この背信という言葉と、帰るという言葉は、さっきのアーモンドとミハルみたいな、シャカードとシャケドみたいな形で同じ発音の似ている言葉で、同じ語根です。swb。帰るがsubu、背信がsobabimですかね。ストロング番号だと1番しか違いませんので、帰る、帰ってしまったイスラエル、「神様から帰ってしまったイスラエルよ、帰れ」ということなので、「帰る、帰る、帰る、帰る」とずっと言われているような、悔い改めるのも帰るという事ですから、出ていったものが帰るようにということ、ずっと話しているというのが3番目の段落です。

3章で終わらないで、4章の始めがここに4章の2節までありますけど、この4章の1、2節はなぜそこにあるかというと、5章の1、2節と、並行しているからです。5章の1、2節に「公正と真実」そして「主は生きておられる」という話がここにあります。4章の最初も「真実、正義、正直」、これは公平ですね。主は生きておられると誓うならばと言っています。ここ(5章)は偽って誓うという話があります。この箇所4章の出だしと、5章の出だしを尊重した構造にすべきでしょうということで、こちらの(3の1から4の2)段落の終わりのところ、それと4の22からの段落にも入ってますということで、そこに並行があることを見えています。

次の4の最初(4の3から)に行く前に、4の22からと、5の12からという2つを見ると、最初の2つの段落(2の1から、2の20から)の時に、アッシリアとエジプトの話がありました。こちらの段落も終わりの方に似てる箇所があります。「私はこれらのことのために彼らを罰しないでいられようか。このような国民にあだを返さないであろうかと主は言

われる」という5章9節と、5章の29節で「主は言われる。私はこのようなことのために彼らを罰しないであろうか。私はこのような民にあだを返さないだろうか。」というさばきを行いますということを、この2つの段落(4の22から、5の12から)で話していると。その終わりのところが似ている言い方になっていますね。4章の22節からのところは、主を知らない、愚かな者なわけですね。主の道を知らない。知っているはずなのに知らないということですね。主を知らない愚かな者が、背信と姦淫を犯しているという、そのことによってさばきが来る。

5章12節からの方も、愚かで悟りがないと。偽りの預言というようなことが、このままとりとして見るができると思います。偽りの預言をするのですが、こちらは知らないというよりも恐れがないのですね。さばきが来ても、全く恐れていないというのが、この偽りの預言者たちですね。さばきが来ない。偽りの預言をしてもさばかれないというのが、この5の12からの方ですから、主を知らない愚か者、偽りの恐れのない者という、この人たちに対するさばきですということが、4の22からのところ。

先ほどは背信、姦淫に対して(2の1から、2の20から)、帰れ(3の1から)と言っていました。後半はこの愚か者と偽りにさばきが来る(4の22から、5の12から)ということですね。その前の箇所、4の3のところが警告になっています。「割礼をしなさい。主の怒りがくる。主の燃える怒りが来る。荒布を着て嘆き悲しめ。悪を洗い清めて、悔い改めて待て。遠い国から滅びが来る。」という、このエルサレムに告げられるさばきが来ますという宣言のところなのですが、ここには「悪を悔い改めよ。悪の結果にまことに苦く」という言葉があります。災いが来るというのと悪というのは同じなのですね、災いは災いになったり、悪になったりしますけれども、この悪が来ることに對して、悪が来ますよということを、「ラッパを鳴らして、ラッパの声、ラッパの声」というラッパの声という音が、この箇所と、先ほどのこの終わりの方6章の中に、2度ラッパを吹き、ラッパの音と、この忠告するさばきが来ますという宣言をする音、このラッパの音が鳴り響いて宣言されている。ある意味でこのエレミヤの口の言葉というのは、このさばきの宣言の言葉のようなものなのだと思います。ラッパは角笛と言う言葉ですね。ショーファーshowpharと言って、特別にそのラッパを吹き鳴らす箇所は、祭りの中だったり、あらゆるいろいろな出来事の中にあたりします。出エジプト記20章の十戒を与えられるところの前、19章のところでこのショーファーshowpharが鳴らされます。それとヨシュア記6章、エリコの町を回ってさばきを成すところでも、そこで鳴らしてる音は、ショーファーshowpharです。ダビデが幕屋を作って、契約の箱を運び上って、いよいよ安置するというその前の箇所で、このショーファーを鳴らして契約の箱が入っていくという意味で、ヨシュアの時も契約の箱が7度回っていました。契約の箱、契約のさばきを表している角笛を鳴らして、「悔い改めよ。神の国が近づいた。神のさばきが近づいた。」ということを行っているというのが、この4章3節から21節まで。この災いが来るということに對して、その災いの内容が、4章22節から、5章12節から語られて、この最初の1章で、エレミヤに言われていたさばきが、6章のところで残念ながら実行される。その中に有罪だということが、残念ながら確定しますということ、2章から5章までの間で語っているというような段落ではないかと見ています。